

使徒の働き1章 「聖霊の約束」

1A ルカの続編 1-2

2A 御国のご計画 3-11

1B 聖霊による証人 3-8

1C 聖霊によるバプテスマ 3-5

2C 聖霊の力 6-8

2B 昇天 9-11

3A 約束を待つ祈り 12-26

1B 心一つの祈り 12-14

2B ユダに代わる使徒職 15-26

1C 聖書のことばの成就 15-20

2C 祈りによる決定 21-26

本文

使徒の働きに入ります。とてもわくわくしています、教会の始まりであり、いかに主のことばが世界に広がって行ったのかを物語っています。世界の全ての教会が、模範にすべき姿です。私たちの教会も、ここから多くを学び、その中に生きていきたいと願います。

1A ルカの続編 1-2

¹テオフィロ様。私は前の書で、イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました。

使徒の働きの著者は、ルカです。「前の書」と書いていますが、これがルカによる福音書のことです。その冒頭をお読みします。「1:1-4 私たちの間で成し遂げられた事柄については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人たちが私たちに伝えたとおりのことを、多くの人がまとめて書き上げようとすでに試みています。3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べていますから、尊敬するテオフィロ様、あなたのために、順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います。4 それによって、すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていたいただきたいと思います。」ここから、前の書というのは彼の書き記した福音書で、そして使徒の働きは後の書、と言ったらよいでしょう。

ルカ伝ですでに学びましたが、ルカについてまず、ご説明します。ルカは、使徒パウロの同伴者でありました。使徒の働きにおいて、パウロの第二次宣教旅行の時に、パウロの一行がトロアスからヨーロッパに向けて船出する時のことです。それまでは、パウロの行動は「彼」と書いていて、またシラスやテモテが加えられると、「彼ら」と言っています。けれども 16 章 10 節で、パウロがマ

ケドニア人の「助けてください」という懇願を幻の中で見たので、「私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。」とあります。そしてトロアスから船出します。「私たち」に変わっています。そして、パウロたちが、第三次宣教旅行からエルサレムに行く旅をしている時に、再び「私たち」という言葉が出て来ます(20:5)。それから同行して、エルサレムでパウロを巻き込んだ騒動が起こり、彼はカイサリアで監禁されます。そして、ローマでカイサルの前で裁きを受けるために船に乗りますが、その時も「27:1 私たちが船でイタリアに行くことが決まったとき」とあり、ルカが同行していたことが分かります。

主イエスの生涯において同行した人ではないし、ユダヤ人でもないでしょう。一部に、彼は改宗したユダヤ教徒ではないか？という意見もあります。福音書を見ると、ユダヤ教に造詣がある人であることが伺えるからです。いずれにしても、直接目撃したわけではないけれども、目撃した人々の証言を綿密に調べて書いたのが、彼の福音書です。そして、使徒の働きも前半は直接体験しているわけではないですが、後半はかなりの部分はパウロと同行していたので、自分も目撃している部分が多かろうと思います。

そしてルカは、医者です。コロサイ書 4 章 14 節に、ローマで監禁されていたパウロに付いていたのが、「愛する医者のルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。」とあります。福音書でも、使徒の働きでも、医者らしく、体の描写が克明に描かれていることがあります。彼は知識人であり、ギリシア語の文体も美しく、当時の文書形式に倣った書き方をしているそうです。1部と2部に分けて語っている文書が当時の文献にあり、1部と2部に別れています。ルカは初めから、福音書を書き、それから使徒の働きを書く構想を練っていて、それで書き始めていたと考えられます。

そして「テオフィロ様」という書き出しになっていますね。テオフィロは、「神に愛されている者」という意味です。福音書では彼を「尊敬する」という前書きがありますが、ローマ高官に対する尊称を使っているのが、ローマ高官ではないか？とも思われます。テオピロが、ルカの著作活動を援助したパトロン、経済的な後援者であったのかもしれませんが。

そして、ルカは注意深く、「イエスが行い始め、また教え始められた」と書きました。ルカによる福音書は、イエス様が天に昇られるところまでしか書かれていないのに、行い始め、教え始められたと書いているのです。つまり、使徒の働きは、イエス様の働きなのです。イエス様の、聖霊による、使徒たちを通しての働きの続きなのです。数多くの教会が、標語として「使徒 29」というものを掲げます。例えば、韓国のオンヌリ教会はそれで、世界宣教に情熱を傾けています。日本では、愛のソナタという伝道集会を何度となく開き、また新改訳聖書 2017 の音声付きのアプリの無料ダウンロードも、オンヌリ教会の関係者が関わっています。それは、「私たちは使徒の働きの続きなのです」ということです。使徒の働きは 28 章で終わりますが、私たちはその続きを担って、聖霊に導かれ、イエス様に働いていただきますという意思表示です。

²それは、お選びになった使徒たちに聖霊によって命じた後、天に上げられた日までのことでした。

ルカによる福音書の最後と、使徒の働きのはじめは重なっています。これから読む 3 節から 11 節に、復活され、昇天するイエス様の言葉を読むことができますが、ルカの最後も、その言葉になっています。昇天して、弟子たちがエルサレムに帰り、宮にいて主をほめたたえていたというところまで書いています。

2A 御国のご計画 3-11

1B 聖霊による証人 3-8

1C 聖霊によるバプテスマ 3-5

³イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。

イエス様が生きておられることを、「数多くの確かな証拠をもって」示してくださいました。これまでも福音書の中で見てきたし、パウロはコリント人への手紙第一でこう書いています。「I コリ 15:3-8 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、4 また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、5 また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。6 その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中にはすでに眠った人も何人かいますが、大多数は今なお生き残っています。7 その後、キリストはヤコブに現れ、それからすべての使徒たちに現れました。8 そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。」使徒 9 章で、パウロがダマスコに行く途上で、イエス様が彼に現れたことが書かれています。

このようにして、使徒たちは確かに、イエスはよみがえられ、生きておられるのだということを確認しました。トマスの時を思い出してください、彼は、「ヨハ 20:25 私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言いました。すると八日目に、トマスのいるところでイエス様が現れ、「20:27 あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」と言われたのです。つまり、彼らには目で見ていなかっただけで、主はそこにおられて、トマスの語ったことを聞いておられたのです。天に昇られた後に、残された弟子たちに、聖霊によって主が共におられるのです。ですから、目に見えていなくとも、主がおられるのだということを彼らは身に着けていったのではないか、と思われれます。

そして、確かな証拠になったので、ペテロや使徒たちは、全く別の人であるかのように変わりました。主を三度、知らないと言った時と同じ、大祭司のいるところで、ペテロは大胆にも、イエス様が救われる唯一の名であることを伝えたのです(使徒 4:9-13)。教会の伝承では、ヨハネ以外はすべて殉教の死を遂げました。偽物だと分かっている死ねる人はいません。

そして、「四十日にわたって彼らに現れ」た、とあります。聖霊が降られるのは、使徒 2 章によれば、五旬節の時、つまり、復活されてから五十日目に聖霊が降ります。残りが十日ほど残されてから、ご自身が天に昇られる準備を始められます。四十日と言え、イスラエルの民にとっては荒野での旅が四十年間であり、それが過ぎれば約束の地に入ることができます。主ご自身の生涯にとっては、ユダの荒野において、四十日四十夜、断食をされた後に悪魔の誘惑を受けられました。それから、聖霊に満たされて、神の御国の福音を宣べ伝えられました。ユダヤ人である弟子たちにとって、四十日というのは、そのような期間として受け止めたかもしれません。

そして主は、「神の国のことを語られた」とあります。ガリラヤにおいて、御国の福音を語り始められました。主は、彼らをガリラヤに行かせて、そこで語られましたが、まさにこれまで語られたことを、ご自分の死とよみがえりの視点から、再び語れたのではないかと思います。その時には、ただ聞いているだけで悟ることができなかったことを、心が開かれて悟ることができたでしょう。ルカの福音書の最後に、「24:44 わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」とあります。

神の国とは、神が王となっている状態のことです。そして、神はキリストを選ばれて、この方を統治者として立てることによって、ご自分の国を立てることを御心としておられます。キリストが王となっているところであれば、それがご自身が肉体をもって弟子たちの共におられた時も、また御霊によって、ご自身が教会に満ちておられるにしても、そして天の神の右の座に着いておられていても、そして主が、全世界に再び現れて、地上に神の国を立てられるということにおいても、神の国ですね。

⁴ 使徒たちと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。⁵ ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。」

「使徒たちと一緒にいるとき」とありますが、これは「塩と一緒に食べた」という意味にもなり、新共同訳では、「彼らと食事を共にしていたとき」となっています。午前礼拝でお話したように、主の言われている「父の約束」とは、聖霊の約束のことです。聖書には、神の国が臨む時に神の霊が注がれることが書かれています。ヨエル書 2 章 28 節もそうですが、イザヤ書にはこうあります。「32:15-16 しかし、ついに、いと高き所から私たちに霊が注がれ、荒野が果樹園となり、果樹園が森と見なされるようになる。公正は荒野に宿り、義は果樹園に住む。」御霊が注がれ、そして神の国が実現するのです。

そして、その御霊が注がれるというところの神の約束が、聖霊のバプテスマという形であなたがたに与えられますよ、ということになります。新約聖書にて、使徒たちが御霊について、「後に来る回復の前触れ」のように語っています。「エペ 1:14 聖霊は私たちが御国をうけつぐことの保証で

す。」ここの保証は「頭金」と訳すことができ、御国における神の祝福のうちの一部ということです。それから、ローマ 8 章には、被造物が、「8:22 ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。」とあります。けれども、主が戻ってこられたら解放されるのですが、「8:23 御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだは贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」とあります。

そして、ヨハネが水でバプテスマを授けましたが、そのバプテスマをイエス様ご自身も受けられ、その時にどうなったかを思い出してください。「ルカ 3:22 聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。」とありました。そして主は、聖霊に満たされて、御国を宣べ伝えていかれたのです。同じようにして、イエス様は弟子たちに聖霊によってバプテスマを授け、彼らに御国の福音を宣べ伝えるようにお任せになっていくのです。

2C 聖霊の力 6-8

⁶そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。「主よ。イスラエルのために国を再興してくださいるのは、この時なのですか。」「⁷イエスは彼らに言われた。「いつか、どんな時とかがいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。」

弟子たちが、ここで以前から抱いていた期待を話しました。先の預言にありましたように、聖霊の約束は、神の国の到来に密接に関わっています。ですから、弟子たちは、イエス様がローマを倒して、エルサレムで王となられて神の国を立ててくださる、イスラエルを回復させてくださる時なのでは？と思ったのです。しかし、そのようなことは、父が権威を持って定めていることで、あなたがたが知るようなことではない、と言われます。イエス様が、ご自身が戻ってこられることについて、「マタ 24:36 その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」と言われたことを思い出してください。父なる神がお定めになっていることです。

これは、クリスチャンの中でしばしば話題になる、「あの人は救われたのか、この人はどうなのか？」ということに似ていますね。「いや、この人は救われない」という排他的な意見も、「いや、この人は救われている」ということも、あたかも救いが、私たち自身によって成し遂げられるかのような前提で語っていることに気づきます。そこで忘れられているのが、誰が救うのか？ということです。父なる神です。この方の権威によって救われるのです。同じように使徒たちは、自分たちに知られていないことをあたかも知っているかのように語り、また自分たちによって訪れるのではない神の国を、自分たちでもたらそうとしているかのように語っていました。

ところで、ここの箇所をもって、「神の国について、再臨について、それは話題にする必要はない。」とする解釈をする人々がいます。けれども、実際はその正反対です。今は御霊が注がれて、

世界中に福音を伝えるのだけれども、それは一時的であり、主は戻って来られてイスラエルを回復する、と信じていました。聖霊が自分たちに降ってから間もなくして、ユダヤ人に対してこう宣べ伝えていきます。「使 3:19-21 ですから、悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られます。20 そうして、主の御前から回復の時に来て、あなたがたのためにあらかじめキリストとして定められていたイエスを、主は遣わしてくださいませ。21 このイエスは、神が昔からその聖なる預言者たちの口を通して語られた、万物が改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。」万物の改まる時とは、イスラエルの回復と世界の刷新です。これが、使徒たちが一貫して語った、重要な教えであり、希望です。

⁸ しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

今、弟子たちがしなければいけないことは、エルサレムで父の約束を待っていることです。聖霊が臨むのを待っていることです。そして、主が彼らに命じておられた世界の果てまでの宣教、すべての国民を弟子にしなさいという命令、このことのための力が与えられます。みなさんも、ぜひ、聖霊を熱心に求めてください。聖霊のバプテスマによってのみ、主の与えられた、私たちには決して成し遂げられない働きをすることができます。そして、自分が何だかということではなく、自分によって、聖霊が世に対して過ちを明かされるのです。「ヨハ 16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかにされます。」自分には全く力がないということ、自分はキリストと共に十字架に付けられていること、イエス様から離れては、自分は何もできないのだということ、その中で、いと高き所から聖霊が降るのです。

そして午前礼拝でお話したように、ここから、使徒の働き全体の流れが分かります。ここでのイエス様の言葉が、どのように実現していくかを見ていきます。初めはエルサレム、それからユダヤ全域とサマリア、そして地の果てです。

2B 昇天 9-11

⁹ こう言うてから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。

主が天に引き上げられました。覚えていますか、ヨハネによる福音書では特に、イエス様をご自分の父のところに戻ることを強く意識しておられました。「13:3 イエスは、父が万物をご自分の手に委ねてくださったこと、またご自分が神から出て、神に帰ろうとしていることを知っておられた。」何度も何度も、主が父のところに行かれることを語られました。そして、それは主ご自身に万物がまかされていることを示すものです。主は、神の右の座に着かれました。そして、すべてのものをご自分に下に置かれました。「エペ 1:20-21 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、

主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」そしてこれを実行に移す時、それが再臨です。

「雲がイエスを包み」とあります。これは単に、上空に雲があったということだけを意味していません。神のご臨在の栄光の雲です。主がすべてのものの支配を父から与えられたことを示すものです。ダニエルがその幻を見ました。「7:13-14 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」イエス様が、大祭司カヤパの前で、ここを引用してご自身が天に上げられて、また戻ってこられることを証言されましたね。「マタ 26:64 あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」そこで、弟子たちに二人の人が現れます。

¹⁰ イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。すると見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らのそばに立っていた。¹¹ そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

この二人はおそらくは御使いでしょう。復活の時の墓にいた御使いと同じ人たちかどうか分かりませんが、御使いでしょう。ここで見上げているのではなく、またおいでになるので、あなたがたは、主の命じられたことを行いなさい、それに集中しなさいということです。彼らはずいぶん、主の言われたことに従います。イエス様が去ることを告げられたら、悲しみに満たされました。けれども今、復活による喜びが与えられて、またお会いできる希望が与えられて、彼らは、今は喜びに満たされています。ルカの福音書の最後には、「24:52-53 彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、いつも宮にいて神をほめたたえていた。」とあります。この喜びと希望を私たちも持って行きたいですね。

そして、「天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります」とあります。ここは大事で、世の終わりには惑わしが多くなることを主は予め語っておられましたね。「見よ、ここにキリストがいる。」とか、「そこにいる」とか言っても、信じてはいけません。」と言われました。そうではなく、「稲妻が東から出て西にきらめくのと一緒のようにして実現するのです。」と言われました(マタイ 24:23,27)。ヨハネが黙示録で証言しました。「黙 1:7 見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかし、アーメン。」その釘の刺された跡を残したままで天に昇られましたが、同じようにその跡を残したままで、けれども栄光の雲に包まれて、戻ってこられます。

ところで、主はオリーブ山の東側の麓から天に昇られました(ルカ 24 章による)。オリーブ山から

昇られて、そして天から地上に戻ってこられるのもオリーブ山です。それはゼカリヤ書に書かれています、「14:4 その日、主の足はエルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山はその真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ、残りの半分は南へ移る。」

3A 約束を待つ祈り 12-26

そして、弟子たちは主の命令に従います。

1B 心一つの祈り 12-14

¹²そこで、使徒たちはオリーブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に歩くことが許される道のりのところにあつた。

主が天に昇られたのは、ここで見ると安息日であることが分かります。この八日目、次の週の日曜日の五旬節で聖霊が降ります。安息日には、その規定から歩くことのできる距離が決まっています。ヨシュア記 3 章 4 節で、人々と契約の箱の間が 2000 キュビトの距離を置かないといけないというところから、1^キぐらいの距離です。確かにオリーブ山からエルサレムは、それだけ短い距離にあります。以前、正統派のユダヤ教徒の方が来日されたのですが、安息日に備えて、その会場であるお茶の水クリスチャンセンターから、ほどなく近いホテルに宿泊されたのを聞いています。

¹³彼らは町に入ると、泊まっている屋上の部屋に上がった。この人たちは、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであつた。¹⁴彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。

ここの「屋上の部屋」は、伝承によれば、主が弟子たちと最後の晚餐を取られた屋上の部屋ではないかと言われています。弟子たちが、ユダヤ人たちを恐れて戸を閉じて集まっている時に、主がその真ん中に現れましたが、それもこの部屋ではないか？とも言われています。最後の晚餐の時から、復活、そしてここでの昇天後の祈りがそこで捧げられたのかもしれないです。

そして、イスカリオテのユダを除く使徒たち 11 人の名が列挙されています。そして、イエス様に仕えてきた女たちもいます。それと共に、興味深いのは、イエス様の肉の家族がそこにいることです。主が死なれる直前に、母マリアをヨハネに託して、その扶養を言いつけました。ヨハネの福音書では、弟子たちは始め、イエス様の肉の家族と共に行動して、あのカナの婚礼でも、イエス様だけでなく弟子たちもマリアは呼んでいました。けれども、主が本格的に宣教の働きを始めてからは、彼らがイエス様を引き取りに来ようと思ったら、「マルコ 3:35 だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」と言われました。ヨハネ 7 章には、肉の兄弟たちがイエス様に、「7:4 自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなこと

を行うのなら、自分を世に示しなさい。」と言ったのですが、それは「7:5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。」とヨハネは注釈をつけています。

今、血のつながっている家族も、イエスが自分の主、救い主、神の子であると確信して、他の弟子たちと一つになって祈ることができているのです。特に、母マリアにとっては大きな試練だったでしょう。彼女は初めから御使いガブリエルに告げられていましたが、それでも心の葛藤は続き、主の言われたことで、思い巡らしていたという言葉がありました。今は全き確信の中にいます。私たちの肉の家族も、霊にあっても家族となることを祈り求めましょう。

2B ユダに代わる使徒職 15-26

1C 聖書のことばの成就 15-20

¹⁵ そのころ、百二十人ほどの人々が一つになって集まっていたが、ペテロがこれらの兄弟たちの中に立って、こう言った。

彼らが一つになって集まっていました。これは物理的に一つになっていただけでなく、一つの共同体として、イエス様を主とする共同体として集まっています。120 名ということも象徴的です。12 は統治を示す数字で、イスラエル十二部族、そして十二使徒がいます。この中でペテロが、立ち上がって語り始めました。これまで私たちは福音書でも、ペテロが弟子たちの間で率先して物事を進めていく様子を見ました。前回、ヨハネ 21 章で、彼が漁に行き、他の弟子たちがついていきましたね。彼が、イエス様を三度知らないと言ったのですが、しかしイエス様から、「あなたはわたしを愛しますか」と聞かれて、三度、愛しますと答えています。そして、羊を飼いなさいと命じられ、イエス様について行きました。

ピリポ・カイサリアにおいて、ペテロはイエス様を、「マタ 16:16 あなたは生ける神の子キリストです。」と告白しました。それに基づいて、イエス様はわたしの教会を建てると言われました。そして興味深いことを語られます。「16:19 わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」神のご計画の中で、ペテロが天の御国の鍵が与えられているということです。

先ほど、エルサレム、ユダヤとサマリア、それから地の果てにまでわたしの証人となるという、主のご計画を見ました。その一つ一つの分岐点において、まるで天の御国の鍵が開かれていくところにペテロがいました。2 章において、彼らが聖霊で満たされ、ペテロの説教でユダヤ人が三千人、バプテスマを受けます。それから、8 章でピリポが伝道をして、サマリア人が救われていきますが、そこにペテロとヨハネが遣わされ、手を置くと、サマリア人が聖霊のバプテスマを受けました。そして 10 章、ローマの百人隊長コルネリウスが、ペテロが語る主のことばを聞いて、そこで異言を語り、神を賛美しているのを見ました。聖霊のバプテスマを受けたのです。それで、その場で水のバプテスマも授けました。これは大きかった、神の救いは異邦人にまで及んでいたことが、教会の中

で明らかにされていったのです。このようにして、ペテロは誕生したばかりの教会において、指導的役割を果たしました。

¹⁶「兄弟たち。イエスを捕らえた者たちを手引きしたユダについては、聖霊がダビデの口を通して前もって語った聖書のことばが、成就しなければなりませんでした。

彼はこれから、イスカリオテのユダに代わる使徒を補充すべく動いて行きます。ユダは、イエス様を捕えた者たちに手引きをしたのですが、それは、聖書のことばの成就だったということです。ここで、聖書についてとても重要なことをペテロは語っています。一つは、その聖書のことばが「聖霊」によって与えられているということです。これを「靈感」とも言いますね、神の息が吹き込まれた、神によって語られたということです。ダビデ自身が、自分が主の霊によって語っていることを話しています。「Ⅱサム 23:2 【主】の霊は私を通して語り、そのことばは私の舌の上にある。」主イエスご自身が、ダビデは聖霊によって語ったことを確認しておられます。「マル 12:36 ダビデ自身が、聖霊によって、こう言っています。『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。』』」そしてペテロが、ダビデが聖霊によって、これから引用する詩篇の言葉を語ったと言っているのです。使徒パウロは、テモテに「Ⅱテモ 3:16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」と言いました。

そして、「成就しなければなりませんでした」と言っています。これは、神の語られたことは誤っていない、その通りになり、真実であるということです。神学的な用語で、無誤とも言います。誤りがないということです。神の靈感によって、聖霊の導きによって、ダビデなど、聖書の著者は書いているので、誤りから守られているということです。こここの部分は、絶えずサタンが攻撃します。初めに瓦解させたのは、エバの心でした。「創世 3:1 神は本当に言われたのですか。」このようにいって、主の言われたことを疑い、それに背くようにそそのかすのです。しかし、私たちの信仰は、誤りなき神の言葉によるのであり、それを外したら、全く根のない枯れた草木のように、信仰が死んでしまいます。ペテロが、第一の手紙で言いました。「1:23-25 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。24 「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。25 しかし、主のことばは永遠に立つ」とあるからです。これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。」

¹⁷ ユダは私たちの仲間として数えられていて、その務めを割り当てられていました。¹⁸(このユダは、不義の報酬で地所を手に入れたが、真逆さまに落ちて、からだは真っ二つに裂け、はらわたがすべて飛び出してしまった。¹⁹ このことは、エルサレムの全住民に知れ渡り、その地所は彼らの国のことばでアケルダマ、すなわち『血の地所』と呼ばれるようになっていた。)

ユダは、十二使徒の中に数えられていて、金入れを預かっていました(ヨハネ 12:6)。しかし、盗

人であり、そこに入ってくるものを盗んでいたのです。そして、彼はイエス様をも、不正の報酬でユダヤ人指導者らに売り渡してしまったのです。ここに、「不義の報酬で地所を手に入れた」とあります。ユダは、銀貨三十枚を神殿に投げ込みました。そして、首をつって死んだとあります(マタイ 27:3-5)。そして、彼らは、血の代価だから神殿の金庫に入れることはできないとして、その金で陶器師の畑を買いました。ユダがあたかも、地所を手に入れたように書かれていますが、祭司長たちと長老たちは、ユダの名でその陶器師の畑を購入したので、矛盾していません。

それから、ユダは首をつって死んだ後に、他の誰かが城壁からその死体を投げ落として、ヒノムの谷に落ちて、からだが真っ二つに裂け、はらわたが飛び出した、ということがあり得ます。その時は過越の祭りですから、エルサレムに死体があつては儀式的に汚れてしまうからです。そして、その名がアケルダマとありますが、今も、ヒノムの谷にその地所のあるところに跡地があります。

²⁰ 詩篇にはこう書いてあります。『彼の宿営が荒れ果て、そこから住む者が絶えますように。』また、『彼の務めは、ほかの人が取るように。』

初めは 69 篇から、次は 109 篇からの引用です。どちらも、「呪いの詩篇」とも呼ばれるもので、詩篇には、人を呪う祈りが捧げられているものがあります。ここはとても大切なことで、その呪いが主ご自身に対して向けられているということです。主こそが、呪うことのできる唯一の方だからです。復讐は主がするものであり、ゆえに、自分の怒りや呪いをその人に向けるのではなく、主ご自身に向けて、自分から呪いや復讐は手放すのです。ダビデはそのことに長けていました。彼には政敵が多く、しかも自分の身内でした。舅のサウル、次に息子のアブサロムです。そして側近のアヒトフェルが裏切りました。けれども、ダビデは仕返しをしませんでした、その代わりに彼の祈りは激しく、主に裁きをお任せになっていたのです。それでダビデが祈ったところなのですが、実は彼自身のこと以上に、聖霊の導きでキリストご自身が裏切られる預言ともなっています。69 篇は特にそうですし、109 篇もそうでしょう。

これからペテロが、何か主のみこころを認める時、また説教をする時には、聖書のことばをふんだんに引用します。他の使徒たちもそうです。ここに、キリスト者、また主に仕える者たちの手本があります。神の奥義の良き管理者になることです。主のことばを熟知し、それを適切な時に用いることです。

2C 祈りによる決定 21-26

²¹ ですから、主イエスが私たちと一緒に生活しておられた間、²² すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちが離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした人たちの中から、だれか一人が、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。」

十二使徒の資格として、ヨハネのバプテスマにて主がバプテスマを受けられた時から一緒にい

て、先に天に上げられた日までの間、ずっと一緒にいた人、行動を共にした人というのが、条件です。さらに、復活したイエス様の目撃者であるということです。

²³ そこで彼らは、バルサバと呼ばれ、別名をユストというヨセフと、マツティアの二人を立てた。²⁴ そしてこう祈った。「すべての人の心をご存じである主よ。この二人のうち、あなたがお選びになった一人をお示してください。²⁵ ユダが自分の場所へ行くために離れてしまった、この奉仕の場、使徒職に就くためです。」²⁶ そして、二人のためにくじを引くと、くじはマツティアに当たったので、彼が十一人の使徒たちの仲間に加えられた。

弟子たちの中で、二人がいました。これではどちらであるか分かりません。それで、主の選びを求めするために、彼らは祈りました。ところで、ユダが「自分の場所へ行くために離れてしまった」と言っていますが、これはもちろん、地獄のことです。そして、祈った後にくじを引いています。これは、旧約時代、主のみこころを求めるのに使われた方法です。大祭司が宥めの日に、二匹のやぎをアザゼルのために選ぶ時に、くじを引いていますし(16:8)、ヨシユアは相続の割り当て地を決めるのに、くじを引いています(14:2)。箴言 16 章 33 節には、「くじは膝に投げられるが、そのすべての決定は【主】から来る。」とあります。そのくじをも、主が導いておられ、主が決定しておられるということです。

ところが興味深いことに、これ以降、くじ引きによる御心を求める行いはなくなりました。その代わりに、聖霊によって、具体的には預言によって選ばれていました。13 章にて、アンティオキアの教会で、パウロとバルナバが、宣教の働きのために選り分けられますが、聖霊が語られたことが書いてあります。それは預言によって与えられたであろうものです。

そして最後に、マツティアが選ばれましたが、これはペテロが聖霊の満たしの前に行ったことで、彼は異なる。パウロがユダに取って替わった神の選びだとする意見があります。私は違うと思います。十二使徒の条件は、バプテスマのヨハネの時から共にいて、生活をしていたというものです。パウロは復活のイエス様には会っていますが、共にはいませんでした。けれども、特別な、異邦人のための使徒であることは確かです。ここで大事なことは、ペテロが主のみこころを求めたということ。皆で心をつにして祈ったということ。そして聖書のことばは神からのものであり、そこに書かれていることによって行動を決めていくということです。これは、私たちの集まりにおいてもそうであるべき手本です。

今回は、聖霊が降る場面から見えていくこととなります。